

旧彦根藩足軽組屋敷（善利組・太田家住宅）^{せり}

◆彦根藩の足軽と組屋敷の設置

「足軽」は「足軽く疾走する歩卒^{ほそつ}」の意。戦国時代以降、戦の形態が集団戦に変化するとともに、足軽はその主力として重要な役割を担うようになりました。彦根藩では、足軽 1120 人を鉄砲を扱う鉄砲組と弓を扱う弓組に分け、さらに鉄砲 50 人組を 1 組、同 40 人組を 5 組、同 30 人組を 25 組、弓 20 人組を 6 組の合計 37 組に編成していました。この足軽組を預かったのが、1000 石～300 石取の「物頭^{ものがしら}」です。彼らは戦時には「足軽大将」として足軽組の指揮をとる立場にあり、平時においても訓練・組織化して実践に備えさせました。足軽には、通常、22 俵 3 人扶持^{ふりち}が与えられていました。

彦根藩の足軽組屋敷は、中敷組^{けいぢょう}が慶長 11 年(1606)に設置されたのをはじめ、善利組^{げんり}は元和 3 年(1617)の足軽増強により川原町裏手に 8 組が設けられました。その後寛永 6 年(1629)には瓦焼町東側に切通上・下組、また安清町南側にも大雲寺組^{かんえい}がそれぞれ設置されました。中組・北組の設置時期は不明ですが、彦根藩の足軽組屋敷が総体として江戸時代の早い段階に整えられたことが伺えます。

◆善利組屋敷

これら足軽組の屋敷の中で、もっとも規模の大きいのが善利組です。東西約 750m、南北約 300m を占め、幕末期には約 700 戸を数えました。現在、江戸時代の建物は 1 割程度に減少していますが、間口 5 間^{まぐち}（約 9m）、奥行 10 間（約 18m）ほどの敷地に、木戸門^{きとちん}と塀に囲まれた小さいけれども武家屋敷の体裁^{ていさい}を整えた建物を確認することができます。

善利組・太田家住宅は、主屋^{しゅおく}が切妻造り^{きりつまづく}・平入り^{ひらい}りで、道に直角^{むね}に棟を配しており、切妻に下屋を付け、外壁は塀と一体化しています。桁行 5 間、梁間 3 間。江戸時代末期の建物です。建物の平面構成は 4 列 8 室からなり、1 列目は浴室と新台所、2 列目は洋室と台所、3 列目は玄関と中の間、4 列目は次の間と座敷から成ります。1 列目と 2 列目は本来は土間^{どま}で、昭和になってから現在の姿に改造されました。3 列目と 4 列目は当初の姿を留めています。やや変形していますが、玄関・中の間・次の間・座敷の 4 部屋が田の字型になっています。8 畳の座敷には床があり、座敷の外には小さいながら庭が設けられるなど、武家の格式を保っており、彦根の足軽屋敷の典型と言って良いでしょう。足軽屋敷が年々姿を消していく中、貴重な建物であり、平成 16 年度に彦根市指定文化財に指定いたしました。

なお、屋敷の外を走る道は 1 間半（約 2.7m）と狭く、要所に「どんつき」「くいちがい」など城下町に特有の備えが残っています。周囲を散策しながら、確認してみてください。



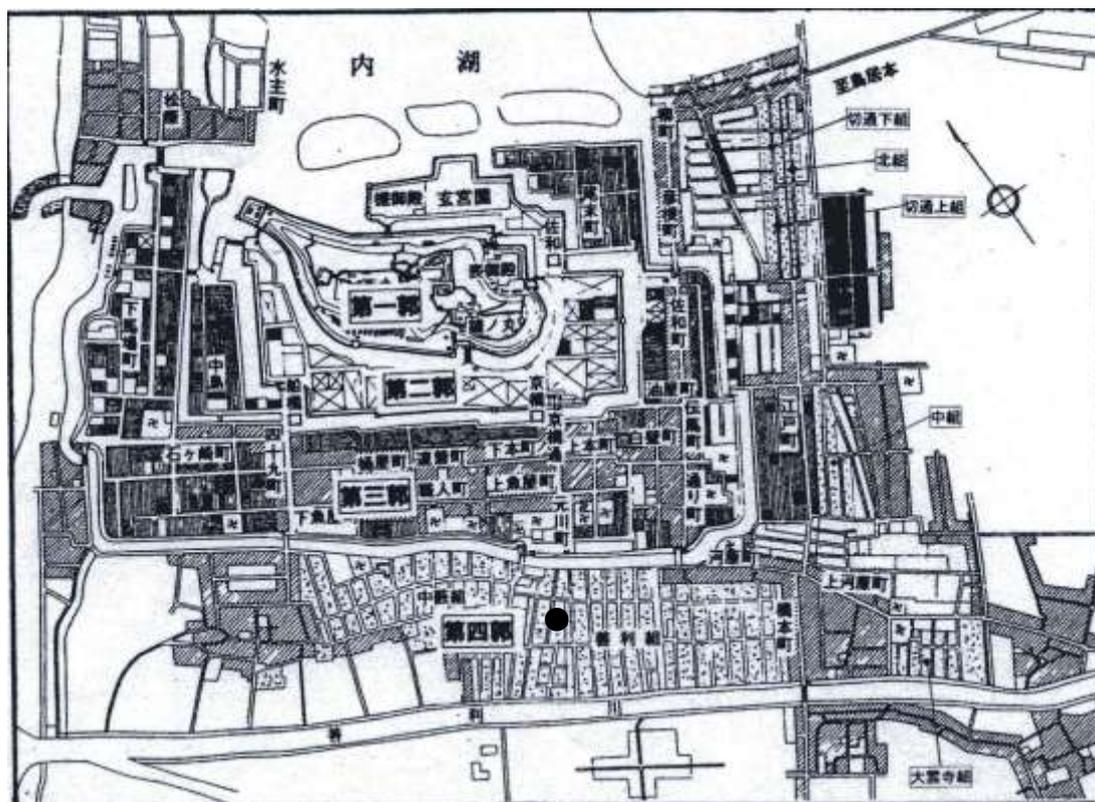
太田家住宅外観

彦根の城下町

彦根の城下町は、大規模な土木工事によって計画的に造られた町です。計画当初、城下は多くの
 の渋や沼のある湿潤な土地が広がっていました。そのため、松原内湖に注いでいた芹川（善利川）
 を約2kmにわたって付け替えて一帯の排水を良くし、琵琶湖に直流させました。また、現在の尾
 末町にあった尾末山を全山切り崩して、周辺の低地を埋め立てたと伝えています。こうした大土
 木工事により、城下町の計画的な地割が可能となったのです。

完成した彦根の城下町は、3重の堀によって4つに区画されていました。内堀の内側の第一郭
 は、天守を中心として各櫓に囲まれた丘陵部分と藩庁である表御殿（現在の彦根城博物館）な
 どからなっています。内堀と中堀に囲まれた第二郭は、藩主の下屋敷である槻御殿（現在の玄宮
 園・楽々園）と家老など千石以上の重臣の邸宅が広がっていました。中堀と外堀の間の第三郭は
 「内町」と称して武家屋敷と町人が、また外堀の外の第四郭である「外町」には町人の住居と足
 軽の組屋敷がありました。内町・外町ともに武士・町人あわせて居住していますが、居住地は明
 確に区分されており、油屋町・魚屋町・桶屋町・職人町など職業による分化配置が見られました。

彦根藩の足軽組は、「中藪組」「善利組」「切通上組」「切通下組」「大雲寺組」「北組」「中組」
 で構成されていましたが、第四郭つまり城下町のもっとも外側に、城下を取り囲むように屋敷を
 連ねて、彦根城とその城下町を守備する役割も担っていたのです。



彦根城下町割図

